

楽園伝説と *King Richard II* の 〈イングランド〉

小野良子

〈目次〉

序論 〈楽園〉としてのイングランド

1章 〈楽園伝説〉

1. 『ブリタニア列王史』が描く 〈ブリタニア〉
2. 古代ギリシア・ローマ神話が描く 〈楽園〉
 - (1) カリュプソーの 〈オギュギア〉
 - (2) ヘスペリデースの 〈洋上楽園〉
 - (3) エーリュシオンの 〈至福の島〉
 - (4) 春の女神の 〈常春の野—エンナ〉
3. アーサー王の 〈アヴァロンの島〉

2章 記録の中の 〈ブリタニア〉

1. カエサル『ガリア戦記』(紀元前 58-51 年)
2. ローマ帝国が見たブリテン島

結論 〈地の果てのはるかなる〉ブリテン島

参考文献

SYNOPSIS

キーワード：楽園伝説, 古代ギリシア・ローマ神話, アーサー王伝説, ブリタニア, 古代ローマ帝国

序論 〈楽園〉としてのイングランド

This other Eden, demi-paradise,
This fortress built by Nature for herself
Against infection and the hand of war
This happy breed of men, this little world,
...
This blessed plot, this earth, this realm, this England,
(*King Richard II*, 2, 1, 42-50.)

「この地上の楽園，第二のエデンの園」——シェイクスピアは『リチャード二世』の中で，リチャード二世の叔父，ランカスター公爵ジョン・オヴ・ゴントに，イングランドの〈古きよき時代〉を〈エデンの楽園〉として想起させる。一方，リチャード二世が統治しているイングランドは，「賃貸しされている，まるで貸家かつまらぬ農地のようなもの」になり果て，「恥辱に取り巻かれ」，「世界にあまねく名声を轟かせたこの国」（『リチャード二世』，二幕一場，58-63行）が，「地上の楽園」としての〈表象〉を喪失してしまった，とゴントは嘆く。王が追従に耳をふさがれて，「祝福されたイングランド」を墮落させた，とゴントは語るが，果たして，当時の現実のイングランドは，〈地上の楽園〉として認識されていたのだろうか。

『リチャード二世』はおそらく，1595年ごろに上演され，上演劇団が1597年に出版，初版（Q1）のあと，すぐにQ2，Q3が1598年に出版されて，2年の間に3版を重ねたことから，作品の読み物としての需要の大きさが窺える。また，フランシス・ミアズ（Francis Meres）が，1598年に *Palladis Tamia* の中で「同時代の悲劇作品の中で最重要作品」（“foremost amongst the tragedies of the day”）と高い評価を与えている。これらの

ことから考えると、同時代の人びとと一少なくとも、『リチャード二世』の観客と読者一の間では、「第二のエデン」としてのイングランド像が共有されていたと考えられる。

本稿では、1章で、「歴史書」の中で記載された「ブリタニア」像と「イングランド」像を読み返し、シェイクスピア時代の〈楽園伝説〉の源流にさかのぼって、古代ギリシア・ローマ神話の「楽園」とケルト神話の「洋上楽園」を概観、2章で、古代ローマ帝国が見た「ブリタニア」を「残された記録」から検証する。なお、シェイクスピアの『リチャード二世』が描く「イングランド」像については、機会を改めて検討したい。

1章 〈楽園伝説〉

1. 『ブリタニア列王史』 (*Historia Regum Britannie*, 1138年) が描く〈ブリタニア〉

『ブリタニア列王史』はベネディクト会修道院の下級修道士であったジェフリー・オヴ・モンマスが書いたブリタニア諸王の「歴史」である。ジェフリーは献辞の中で、『列王史』を執筆するに至った経緯を語っている。

しばしば、心のなかで多くの題材を思い巡らしていると、わたしはブリタニアの諸王の歴史に思い及んだ。ギルダスや聖ベータが輝かしい書物のなかで諸王たちを物語ってから、主なるキリストが託身する前にブリタニアに住んでいた王たち、それに主の託身後のアルトゥールス（アーサー）王や、その後を受け継いだその他の諸王については何も語られていないが、わたしはそれが不思議なことに思えた。これらの諸王の事績は永遠に称賛するに値することは周知のことであり、さながら文字で誌されたごとくに多くの人びとが好んで伝誦し、讚美してきたのである。

折にふれ、わたしはかかることを考えていると、オクセンフォルディア（オックスフォード）の司教座助祭で弁論術や外国の歴史に造詣の深いワルテールスが、ブリトン語で書かれた実に古い一冊の書をわたしに贈ってくれた。その本にはブリタニアの初代の王ブルートゥスからカドゥアロの息子カドワラドルスのあらゆる事績が連綿徒秩序立って、まことに美しい文章で描かれていた。したがって、わたしは彼の求めに応じて（中略）自分の未熟な文体と筆の運びに満足して、この古書を懸命にラテン語に翻訳したのである。

（『ブリタニア列王史』、献辞、9頁）

ジェフリーがブリトン語からラテン語に翻訳した「ブリタニア諸王の歴史」は、ブリトン語の原典は現在までのところ発見されておらず（瀬谷、367頁）、したがって、「『ブリタニア列王史』とは、著者ジェフリー自身が自由奔放な想像力を駆使し、古来ケルト民族の間に口碑伝承されてきたアーサーに関する諸伝説や年代記作家たちの記述を題材として集大成しラテン語で創り上げたもの」（瀬谷、367頁）で、〈擬似歴史書〉であった。ジェフリーの「歴史書」は、ブルートゥス（古代ローマの国民的詩人ウェルギリウスのローマ建国叙事詩『アエネーイス』(*Aeneis*)の主人公アエネーイスの曾孫）が、紀元前12世紀のトロイア陥落後に、数々の苦難を乗り越えて放浪を続けるトロイア人の一行を連れて、「アルピオン」と呼ばれる島にたどり着き、ブリタニア王国を建国し、初代の王となったことから始まる。

『ブリタニア列王史』は、まず、「アルピオン島の讃辞」から始まる。

鳥々のなかで最もすぐれたブリタニア島は（中略）人びとの利用に適するあらゆる物をつねに絶えることなく恵んでくれる。という

楽園伝説と *King Richard II* の〈イングランド〉

のは、あらゆる種類の金属が豊富にあり、耕作にきわめて適した広大な平地と丘陵地に富み、さらに土壌は肥えているので、さまざまな穀物が季節ごとに豊かに稔る。また、この島にはあらゆる野獣が多く棲む森林地帯がある。これらの森の空き地と牧草地には家畜を飼育する様々な牧草が繁茂し、色とりどりの花々が飛来する蜂に蜜を分け与えている。高く聳え立つ山々の麓には、緑なす草原と景勝の地が点在し、そこには清らかに澄み切った泉がさらさらと瀬音を立ててきらきらと光る小川へ流れ込み、その岸辺に横たわる人びとに心地よい子守歌を奏でてくれる。さらに、この島は湖や魚が豊富な河川によって灌漑され、南部地帯は人びとがガリアへ船で渡る海峡によって洗われている。また、この島の名高い三本の川、すなわちタメンシス（テムズ）川、サブリナ川とファンベル川はあたかも三本の腕のように滔々と流れている。そして、世界中の国々からは舶来品が遙か海を越えてこれらの川へ運び込まれる。

（『ブリタニア列王史』、11-12頁）

「島々のなかで最もすぐれたブリタニア島」には、ノルマン人、ブリトン人、サクソン人、ピクト人とスコット人が住んでおり、「昔はブリトン人が…この島の海から海まで占拠していたが、やがて彼らはその傲慢さゆえに主なる神の復讐に遭い、ピクト人やサクソン人たちに服属することになった」（『ブリタニア列王史』、12頁）、と『列王史』は記す。そして、そもそも彼らブリトン人が「どこからどのようにしてこの島へ上陸したか」（同掲）が語られていく。

『ブリタニア列王史』の次章からは、ブルートゥスが「ブリタニア」を建国するまでの〈歴史〉が綴られている。トロイア戦争のあとで、アエネーイスがトロイアの廢墟を逃れて、息子のアスカニウスを連れて、海路イタ

リアへ向かう。

そこで彼はラティヌス王に丁重に歓迎されると、ルテイリー族の王トゥルヌスはこれを嫉妬して、アエネアース [アエネーイス] に戦いを挑んだ。こうして、彼らは一騎討ちをすると、アエネアースが勝利を収めて、トゥルヌスは殺害された。その結果、アエネアースはイタリア王国とラティヌス王の姫ラウィニアを手に入れたのである。遂にアエネアースの最後の日がくると、息子アスカニウスは王権を受け継いだ。彼はテイベリス川の沿岸にアルバ・ロンガの街を創建し、シルウィウスという名の息子をもうけた。このシルウィウスはひそかに恋の虜となって、ラウィニアの姪と結婚して、彼女は妊娠した。このことが父親のアスカニウスに知れると、むしろその少女は男女いずれの子を身籠もったかを、彼の予言者たちに探り出すように命令した。彼らが事の真相を確認すると、その娘はやがておのれの父母を殺す運命にある男の子を身籠もっており、その子は追放されて多くの国々を放浪したあげく、遂には最高の榮譽の頂点を極めるであろうと予言した。彼らの予言はたがえることなくまさに的中した。(中略) 彼女は産褥で亡くなってしまった。しかし、その幼児を養育するために産婆の手に託され、ブルトゥスと命名された。遂にそれから十五年の歳月が過ぎ去ると、ある日のこと、この若者は父親を伴って狩りに出かけたが、弓の矢の不慮の一撃で父親を射殺してしまった。(中略) ブルトゥスは牡鹿に狙いを定めて矢を射ようとしたが、手元が狂って父親の胸元を刺し抜いてしまったのである。

(『ブリタニア列王史』, 12-13頁)

楽園伝説と *King Richard II* の〈イングランド〉

このあと、父親殺害の大罪に問われたブルートゥスはイタリアを追放され、ギリシアに渡る。そこで、ブルートゥスはトロイアのプリアムス王の息子のヘレヌスの末裔たちに出会った。彼らはトロイア陥落のあと、ギリシア王パンドラススの権力の下で捕虜として身柄を拘束されていた。ブルートゥスは彼らが同じ血統を引く同国人であることを知ると、彼らの仲間の一人として、しばらく一緒に逗留することを決意する。

彼はその勇気と誠実さゆえに瞬く間に大きな名声を博して、この国のどんな若者たちよりも諸侯たちに敬愛された。というのは、彼は賢者のなかにあっても劣らずより賢く、勇者のなかにあっても劣らずより勇敢であったからである。そして手に入れた金銀財宝はすべて部下たちに惜しみなく分け与えた。こうして、彼の評判がすべての人びとに知れ渡ると、トロイア人たちは彼のところへ群れつどって、ブルートゥスが指揮官になって彼らをギリシア人の奴隷の身から解放してくれるようにと願うのだった。

(『ブリタニア列王史』, 13-14 頁)

ブルートゥスは捕虜となっているトロイア人たちの要望に応じて、各地からトロイア人を招集してトロイア軍を結成し、ギリシアからの解放を目指す。まず、ブルートゥスはギリシア王パンドラススにトロイア人の解放を要望する手紙を送る。

トロイア軍の残兵たちの指揮官たるブルートゥスは、ギリシア王パンドラスス陛下にご挨拶申し上げます。かの有名なダルダヌスの血統を引き継ぐ一族は、正真正銘その気高さに相応しい処遇を貴国では不当にも踏みにじられ、彼らは奥深い森の隠れ処に身をひそめ

ております。というのは、彼らはいかなる財宝に恵まれようとも、陛下の奴隷の軛の下で生き長らえるよりは、野獣さながらに獣肉や草木を食べて自由な生活を送ることを選びました。(中略) どうか彼らに憐愍の情をお示しになられ、彼らが失われた自由と服属の軛から逃れるために、占拠した森のなかで安全に住むことをお許しください。しかし、もしこの願いが叶わぬものならば、陛下の善意によって彼らがどこか異民族の国へ旅立つことをお認めください。

(『ブリタニア列王史』, 15頁)

ブルートゥスの手紙はギリシア王の温情を期待したが、しかし、パンドラス王は軍隊を召集して、トロイア人たちを追跡する。ところが、トロイア軍が奇襲攻撃を仕掛け、ギリシア軍は壊滅状態に追い込まれる。その後、戦況は二転三転するが、トロイア軍が優勢となり、ギリシア王の陣営を占領し、パンドラス王を捕縛する。ギリシア王に突きつける要望について検討したトロイア人たちは「子孫のために永遠の平和を保持」(『ブリタニア列王史』, 22頁) するために、「この国を立ち去る許しを求めること」(同掲) に決定する。そして、パンドラス王に、王の長女インノゲンをブルートゥスの妻にすること、それと共に、金銀、船と穀物など船旅に必要なものを供給すること、他の国へ出帆させることを認めさせる。

こうして、ブルートゥス率いるトロイア人たちは、ギリシアを出発し、「二日と一夜順風を満帆に受けて船を走らせ」、レゲティア島に上陸する。島は昔、海賊たちに襲撃されて荒廃し、住んでいる者はいなかった。ブルートゥスは探検するため、三百人の武装兵を送り込み、女神ディアーナの神殿を発見する。武装兵たちはブルートゥスに「神殿に行つて、吉兆を祈願して犠牲を捧げ、土地の女神ディアーナがいかなる国を永住の地として彼らに与えるかを尋ねてみるように」進言。すると、ブルートゥスは占い師

楽園伝説と *King Richard II* の〈イングランド〉

と十二人の長老を引き連れ、犠牲のために必要な物をすべて持って、ディアーナの神殿に向かった。ブルートゥスが女神の祭壇の前で犠牲の儀式を執り行い、「地上のことを解き明かし、われわれは何処に住むべきか、教え給え」(『ブリタニア列王史』, 25 頁), と祈りを捧げた。祈りの言葉を九度、繰り返して、祭壇を四回まわり、葡萄酒を注ぎ、祭壇の前に敷いた雌鹿の毛皮の上に横になると、睡魔に襲われ、眠り込んでしまう。ちょうどその時に、ブルートゥスの前に女神が立ち、彼に話しかけた。

ブルートゥスよ、ガリアの領土を越えて 太陽が沈むあたりに
四方が海に囲まれて 大洋のなかに島がある。

その大洋のなかの島は かつては巨人族が棲んでいて、
今はすっかり荒れ果てたが 汝の種族に適した島である。

この島を得よ。これは汝らの 永遠の住み処となり、
そこで 汝の子孫のために 第二のトロイアが建てられよう。

そこで 汝の末裔から諸王が生まれ、彼らによって
全世界が 征服されることになろう。

(『ブリタニア列王史』, 25-26 頁)

ブルートゥスは眠りから覚めると、仲間たちを召集し、女神の言葉を伝えると、「太陽が沈むあたりにある島」を目指して、出帆した。途中、海賊の襲撃に遭いながらも、勝利し、「獲得した戦利品と掠奪品でさらに裕福になった」(同掲)。ブルートゥスのトロイア軍は着岸した先々で侵略と掠奪、殺戮を繰り返しながら、女神の〈約束の地〉である「西の島」を目指して進んで行った。食料や飲み水不足に悩まされていたトロイア軍は北西アフリカのマウリタニアで船から降り、「小集団に分かれてその地域全体を端から端まで掠奪した」(同書, 27 頁)。南部ガリアのアクウィタニア

では、「この国を完全に荒廃させて彼らの船をあらゆる財宝で一杯にする」ため、内陸部へと進軍し、「街のいたるところを炎上させ、隠れた秘宝をあばき出し」、「田畑を掠奪し」、「最後の一人まで抹殺しようとして、市民や農民をも哀れにも殺戮した」（同書、30頁）。アクウィタニアのほとんど全域を殺戮し尽くして、次に上陸したトゥロノルムでは、ガリア軍と激戦を展開し、「ガリア軍を執拗に追跡して殺害し、勝利するまで殺戮をやめなかった」（同書、32頁）。こうして、ブルートゥスたちは「約束の島」を探し求め、遂にブリテン島南西部にあるトトネシウムの海岸にたどり着いた。その当時は、この島は「アルビオン」と呼ばれ、少数の巨人族しか誰も住む者はいなかった。

この島では、トロイア軍は「全域の殺戮」はしなかったが、それでも、先住の巨人族を山間の洞窟に追い込んで、島の支配を開始する。

この島のさまざまな地域の地勢は実に魅力的であり、魚が豊富な川が沢山あり、さらにみごとな森林にも恵まれていたことがブルートゥスや仲間たちにこの島に住みつきたい気持ちにさせた。（中略）途中で巨人族に出会ったが、これらの巨人たちを山間の洞窟へと追いやった。それから、指揮官の許しを得て、彼らは皆で土地を分配し合った。（中略）遂にブルートゥスはこの島を彼の名に因んでブリタニアと命名し、そして、そこに住む仲間たちをブリトン人と命名した。というのは、彼は自分の名前から派生した言葉をあてることで、後世の人びとに永遠に記憶されたいと思ったからである。

（『ブリタニア列王史』、33頁）

ブリタニアを建国したブルートゥスはトロイア一族を「ダルダヌスの血統を引き継ぐ気高い一族」であるとギリシア王パンドラスに語っていた。

ダルダヌスは、主神ゼウスとエレクトラ（ミュケーナイの王アガメムノンとクリュタイムメストラの娘）の間に生まれ、トロイア王家の先祖である。ギリシア神話のオリュンポス神族の最高神の血統がトロイア王家に引き継がれ、そのトロイア一族のブルートゥスが建国した「ブリタニア」は、女神ディアーナが約束した「第二のトロイア」となった。

2. 古代ギリシア・ローマ神話が描く〈楽園〉

シェイクスピアが生きた時代には、十四世紀イタリアの人文主義者が始めた学問の改革運動が引き継がれ、ギリシア・ローマの文芸・文化を原語と形式に則って再発見する文化的活動が建築家や音楽家、詩人、劇作家によって活発に実践されていた。古典文化の探求のために重要な古典文献の翻訳が、十六世紀の初めに始まり、世紀の半ば以降には、「ブリテン」の文化に影響力を与える古典作品が学者たちによって翻訳され、刊行された。セネカの劇は、1560年代に順次翻訳され、1581年には10作品を集めた『悲劇集』として、まとめて出版された。オウィディウスの『変身物語』は、ギリシア・ローマ神話の集大成であるが、1565年から67年にかけて翻訳された。1579年には、プルタルコスの『対比列伝』が出版されている。

シェイクスピアは古代ローマの將軍タイタス・アンドロニカスの悲劇（『タイタス・アンドロニカス』、1592-94年作）では、オウィディウスの『変身物語』とセネカの『テュエステス』（1560年英訳）を材源に利用し、ギリシア神話の〈恋愛〉の女神ヴィーナスと美青年アドーニスの恋愛を歌った詩（『ヴィーナスとアドーニス』、1593年作）や、古代アテネの森で妖精たちに翻弄されるアテネの恋人たちの「恋のもつれ」を描いた喜劇（『夏の夜の夢』、1595年作）では『変身物語』からインスピレーションを得ていた。

(1) カリュプソーの〈オギュギア島〉

トロイア戦争の英雄オデュッセウスは、戦争終結後、故国イタケへの帰途、嵐に襲われて漂流し、10年に及ぶ冒険を余儀なくされる。オデュッセウスと彼の部下たちは魔女キルケーの島を出帆後、海の魔女スキュラの断崖を航行、そこから太陽神ヘリオスの島トリーナキエーにやってくる。無風で船が身動きがとれず、食料に窮した部下たちが太陽神の牡牛を食べたために神が激怒。ヘリオスはゼウスに懇願して、オデュッセウスの船に〈雷〉を落とし、撃沈してしまう。オデュッセウスはマストにすがって漂流し、カリュプデイス（海の渦巻きの怪物）の渦巻きに呑み込まれそうになるが、頭上に懸かって生えていた大無花果樹を掴んで待ち、マストが再び、渦からはき出されたのを見計らってマストの上に飛び降り、漂流して、たどり着いたのがカリュプソーの島、オギュギアだった。

オギュギア島では、カリュプソーが棲む洞窟のまわりには、「榛の木、ポプラ、香り高い糸杉などが青々と繁り（略）、洞のすぐ入り口には葡萄の蔦が勢いよく伸びて纏わり、熟れた実がたわわに垂れ下がる。互いに近く並んで四つの泉があり、清冽な水が流れているが、流れの向きはそれぞれ違う。そしてまわりにはすみれとパセリとが咲き栄える、柔らかな草原が広がっている。不死の神ですらこの場にすれば、飽かず眺めて楽しむことであろう」（ホメーロス、『オデュッセイア』、第5歌、75-91行）と、謳われる〈自然〉が広がっていた。

(2) ヘスペリデースの〈洋上楽園〉

主神ゼウスはヘーラーとの結婚式を「ヘスペリスの園」で行い、その時、大地の女神ガイアが祝いとして「黄金の林檎」を与えた。ガイアの贈り物の黄金の林檎がのちに果樹園を作り、この果樹園を「ヘスペリスたち」（つまり、「ヘスペリデース」）7人が守り、彼女たちを不死の百頭竜のラードー

ンが助けていた。園は世界の西の果て、「オーケアノス」の流れの近くにあった。オーケアノスは、平坦な円形の大地の周囲を巻いている大洋で、世界のあらゆる河川や泉はこの水が地下を通して地上に現れたものだった。エーリュシオンの野や、ハーデースの国、ヘスペリスの園もすべてオーケアノスの岸辺にあり、太陽はこの河に沈み、黄金の大杯に乗って夜の間に東に渡って、再び、この河から登った。

(3) エーリュシオンの〈至福の島〉

世界の西の果て、「オーケアノス」の河の近くにある、「幸運の野」と呼ばれる島で、神々から特に目をかけられた人間が送られてくる。彼らは死の苦しみを経験することもなく、ラダマンテュスの支配の下、永遠の幸福を享受できる。ホメーロスの叙事詩では、気候温暖で芳香に満ちた島とされ、雪も寒さも、雨もなく、いつも西風の神ゼピュロスの心地よいそよ風が吹いている。

また、ウェルギリウスの『アエネーイス』では、地下の冥府にあり、死者のなかでも生前正しい行いをした者が死後に住む世界で、緑の草原が拡がり、木々が緩やかに風にゆれ、白ボプラの木が繁っている。冥界の王ハーデースは正義の神で、ミーノース、ラダマンテュス、アイアコスの三人の判官に助けられて、冥界を支配している。冥府で死者はアスポデロスの咲く野にさまよい、特別に神の恩寵を得た者は、エーリュシオンの野に住むことを許される。エーリュシオンでは、すべてが紫色に包まれ、この場所だけを照らす太陽と星があった。

ヘーシオドスやピンダロスの描いた「エーリュシオン」は西の外れの大洋河にある「祝福された者たちの島」、あるいは「幸福の島」にあった。

(4) 春の女神の〈常春の野—エンナ〉

エンナの谷には、ペルゴスという深い湖があり、白鳥が湖面で歌を謳う。森が四方から湖を取り囲み、葉群が日よけのように湖を覆って太陽の激しい光を遮っている。しっとりとした地面には草花が一面に咲き乱れて、春の女神が一年中、支配していた。穀物と大地の女神デーメーターの娘ベルセボネーはニンフたちと共に百合やスマレの花を摘んでいるとき、大地が裂け、黒い馬に乗った冥界の王ハーデスが現れて連れ去られたのは、このエンナの野であった。

3. アーサー王の〈アヴァロンの島〉

『ブリタニア列王史』は、「アーサー王」をめぐる古来のブリトン人の史実と口碑伝承を融合させて、〈アーサー王伝説〉に歴史的な骨子を与えた。アーサー王関連の「歴史」が集成され、詳細な記述で紹介されるのは、この『列王史』が初めてであった。『列王史』が記録したアーサー王の生涯と事績は、後世に執筆される「アーサー王」ロマンス群の典拠の書として、中世で最大の影響力を及ぼした。

アーサー王が謀反者の甥との戦いで瀕死の重傷を負い、運ばれていった〈アヴァロンの島〉はケルト神話の〈他界〉であり、ゲール人の伝承では《ティル・ナ・ノグ—常春の国》、《ティル・ターンゲリー—約束の地》、《ティル・ナン・バン—女人の国》などと呼ばれていた（『ケルト神話の世界』、上巻、58頁）。「他界」には、死も苦痛も悪も存在せず、すべてが美しく純粋な、海の彼方の楽園の島とも考えられていた。

アーサー王の生涯を伝える「歴史」や物語は、中世ロマンス群を誕生させたが、背後には、当時のイングランド王ヘンリー二世が王権の権威付けのための政治的野心が働いていた。ヘンリー二世はフランス北西部のアンジュー伯爵でもあり、したがってフランス王ルイ七世の封臣でもあった。イ

イングランド王としての権威付けのため、ヘンリー二世は宮廷詩人ワースに『ブリタニア列王史』を「物語」にすることを命令し、完成したのが『ブリュ物語』(*Roman de Brut*, 1154年)であった。王は、「アーサー王伝説」を利用して、自らを「アーサー王の正統的継承者」とであると公言し、イングランドの王位を確固たるものに位置づけようとしたのである。

ワースの『ブリュ物語』は、このあとに続くアーサー王ロマンスに取り上げられる伝説の原型となり、クレチアン・ド・トロワが十二世紀にワースやその他の材源を利用して、古代ローマの詩人オウィディウスの恋愛詩とも融合させ、「アーサー王伝説」を〈ロマンス〉の文学ジャンルとして完成させた。

さらに、十五世紀のイギリスで、サー・トマス・マロリーが散文の『アーサー王の死』(*Le Morte Darthur*, 1485年)で、『ブリタニア列王史』以来の「アーサー王伝説」を集大成した。

(1) 『ブリタニア列王史』が描く〈アヴァロンの島〉

アルトゥールス(アーサー)がローマ軍との戦争に勝利し、さらに、「アッロプロゲス人たちの緒都市を征服することに専念」(『列王史』, 311頁)。再び、「ローマへ向かいアルプス山脈を越えようとしたときに、王がブリタニアの統治を委託した甥のモードレドゥスが僭主政治と反逆により王国の王冠を戴冠したという知らせが届けられた」(同掲)。甥の謀反を鎮圧するため、アルトゥールスは「ローマ皇帝レオとの対戦のため企てた遠征をとりやめ」(『列王史』, 317頁)、ブリタニアの王たちとその軍隊を率いてブリタニアに引き返す。両軍の間に熾烈な戦いが繰り返され、両陣営に参戦したほとんどすべての指揮官たちがそれぞれの部隊共々に戦死してしまふ。モードレドゥスも「何千人という多くの人びとと共に戦死」(『列王史』, 320頁)し、アルトゥールスも瀕死の重傷を負う。

「アーサー王の死」について言及するのは『ブリタニア列王史』が最初だが、その言及は「事実」のみの記載のごとく、簡潔だった。

かの高名なる王アルトゥールスもまた瀕死の重傷を負い、そこから彼の傷を治すためアヴァロンの島へ運ばれた。彼はブリタニアの王冠を彼の血縁者であるコルヌビア公カドルの息子のコンスタンティヌスへ譲渡した。これは主の託身から五百四十二年のときであった。王の御霊が安らかに憩いたまわんことを！

(『列王史』, 321 頁)

アルトゥールス王が運ばれた「アヴァロンの島」については詳細な説明は一切なく、また、瀕死の重傷を負った王の状況についても語られず、ただ、「死」を想定させる「祈り」の言葉で終わっている。しかしながら、『ブリタニア列王史』の著者ジェフリーは、『マーリンの生涯』(*Vita, Merlini*, c. 1150)の中で、「アヴァロンの島」について詳細に言及し、反逆者モードレドウスとの戦いで瀕死の重傷を負ったアーサー王が「アヴァロンの島」に運ばれてきた経緯を「予言者にして吟遊詩人なる」マーリンに語らせている。

(2) 『マーリンの生涯』が伝える「アヴァロンの島」

『マーリンの生涯』は、中世ウェールズの伝説の中で「狂人にして予言者」として知られていた「野人ミルズイン」(Myrddin Wylit)が、アーサー王の宮廷で「予言者マーリン」となって活躍し、晩年、その回想談を始める、という構成になっている。伝説の中の「野人ミルズイン」は、六世紀頃のブリタニアに実在した歴史上の人物といわれている。紀元575年頃にイングランド北西部のカンブリア州での「アルヴデリズの戦い」で戦乱に

よる大虐殺を目の当たりにして発狂し、カレドニアの森へと逃れ、孤独の中に野生の動物たちと暮らす間に、予言の能力を身につけたといわれる。ウェールズの古詩には、「野人ミルズイン」に言及するものがあり、その一つである「林檎の樹」(“Yr Affallennau”)には、「アルヴデリズの戦い」を想起させる。「野人ミルズイン」はケルト人の神聖な動物である仔豚と一緒にカレドニアの森で逃亡生活を送りながら、ブリトン人とサクソン人の戦いがブリトン人の勝利に終わり、やがてブリタニアの人里離れた南の地(コーンウォール)に、ブリタニアの救世主となる「アーサー」が誕生することを予言する(『マーリンの生涯』, 93-96頁)。

ケルトの予言詩の伝統はウェールズの「ミルズイン詩篇」に限らず、アイルランド、スコットランドにおいても同様にその伝統が存在していた。「ミルズインの狂乱」の話に類似した伝承がスコットランドにもあり、森に住む予言者「ライオケン」(Laioken)は「アルヴデリズの戦い」で多くの戦友たちを戦死させたことへの罪悪感で発狂し、荒野で野獣を友として生きる罰を受ける。ライオケンはブリトン人の間では有名な予言者で知られ、別名「メルリヌム」(Merlynium)、または、「マーリン」と呼ばれていた。

「野人ミルズイン」の伝説はケルト民族の予言の伝統と関連づけられて変遷していったが(『マーリンの生涯』, 102頁)、ジェフリー・オヴ・モンマスは「ミルズイン」をケルト文学の枠を超えた、汎ヨーロッパ的なアーサー王ロマンスの重要人物となる「マーリン」像に昇華させた。

『マーリンの生涯』で、予言者であり吟遊詩人である「メルリヌス」(マーリン)は、ブリタニアを「あらゆるものを豊富に産出する最も恵まれた島」(同書, 46頁)、と描写し、そのあと、「ヒベルニア」(アイルランド)、「ガーデース島」(スペイン南岸)、「ヘスペリデースの園」, 「タープロバナ」(スリランカ)、「チュロス」(バーレーン諸島)に言及して、称賛の言葉を連ねるが、最後に、「『至福の島』と呼ばれる『林檎の島』」について語る。

『至福の島』と呼ばれる「林檎の島」はあらゆるものを自然に産み出すということにその名が由来している。そこでは、畑を耕す農夫もいない。〈自然の女神〉が恵むもので十分であり、土地を耕し栽培することは全く必要がない。この島は自ら作物や葡萄を豊かに稔らせ、林檎の木も森の灌木の草叢から成長する。(略) そこには百年以上もの間、人びとが住んでいる。そこには九人の姉妹らがいる。彼女たちはこの世から逝く人びとを、心地よい掟で治めている。彼女たちの第一の姉妹は誰よりも治療術に熟練していて、その姿形も他の姉妹たちより優れていた。彼女の名はモルゲンと呼ばれ、病気の体を治療するため、あらゆる薬草の薬効を知っていた。さらに彼女は変身術や、ダエダルス [アテナイの名工で、クレタ島の迷路や、息子のイカロスを救出するために翼を作った] のように奇妙な翼で空を飛ぶ術も知っていた。

(略)

カンブラヌムの戦い [アーサー王と甥の反逆者モードレッドとの最後の戦場となった場所] の後で、われわれは深傷を負ったアルトゥールスをバリントゥス [ケルトの初期の伝説によれば、海と異界の神とされる] に導かれてこの地につれて参ったのだ。バリントゥスは海や天空の星座に精通した人だからである。彼が舟の舵手として、われわれは君主と一緒にそこへ到着した。するとモルゲンはわれわれをそれ相応に鄭重に出迎えてくれた。そして、彼女の寝室の黄金のベッドの上に王を寝かせ、自らの高貴な白い手で王の傷から覆いを取って、長い間じっと見つめていた。そして、ついに『彼女とともに長い間そこに留まり、彼女の治療を受けさえすれば、王は健康をきっと回復するでしょう』と言った。したがって、我々は喜んで王をモルゲンに委ねて、順風に総帆を掲げて帰ってきたのであ

る。

(『マーリンの生涯』, 48-49 頁)

アーサー王がアヴァロンの島で妖精モルガンの治療を受け、果たして、完治したかどうかは語られない。しかし、アーサー王不在の王国で骨肉の争いが繰り返されて分裂し、「あらゆる善行が消え去り、哀れな市民たちは城壁の荒廃を放置していた」(同書, 49 頁)。マーリンはこれに対して、「主なる神はわれわれの愚かな罪を罰するため、これらの災厄がわれわれの身の上に降りかかるのを許されるであろう」と語り、「その間隔をぬって好戦的で残忍きわまるサクソン族が襲いかかり」(同書, 49 頁)、街が破壊されていくだろう、と予言する。この予言に恐れた吟遊詩人のタリエシンは、マーリンに「それゆえに、人びとは誰かを遣わしわれわれの指導者(アーサー王)に舟で急遽お帰りになるようお願いしなければならない。もし王はすでに傷が回復したなら、かつての武勇を発揮して敵軍を撃退し、わが人民たちに昔日の平和を取り戻して下さるであろう」(同書, 49-50 頁)、とアーサー王の帰還をマーリンに提案する。しかし、この提案にマーリンは応えず、アーサー王不在の王国の興亡を予言するに留まった。アーサー王が果たして完治したのかどうかも言及されず、また、王の現状も伏されたままで、マーリンの「語り」は終わる。

(3) 『アーサー王の死』の〈アヴァロンの島〉

サー・トマス・マロリーはフランス語で書かれた「アーサー王の流布本物語」を原拠として、アーサー王と彼の騎士たちの物語群を集大成して英訳版にまとめたが、印刷業者のキャクストンがこの写本に『アーサー王の死』と標題を付けて、1485年に出版した。キャクストンは「アーサー王」に関する書物を出版した目的は「アーサー王こそ、他のどのキリスト教徒の国王よりも、われわれイギリス人が覚えておかねばならぬ人物」(『アー

サー王の死』, 序文, 7頁)であり, 「高貴な方々が, 騎士道の華々しいわざや, 当時の一部の騎士たちがならいとした君子らしい有徳の行為をお読みになって, 学ぶことがおできになるように」(同書, 11頁)トマス・マロリーの写本を印刷した, と述べている。しかしながら, そもそもキャクストンに「アーサー王」についての出版を促したのは, 「イングランド王国の高貴な方々」(同書, 7頁)である, とキャクストンは序文で説明している。

このイングランド王国の高貴な方々がお見えになって, 何度もわたしに御下問なさいました。お前はなぜ, かの神聖なる聖杯の記録を書かせ印刷させないのか。また, あの最も有名なキリスト教徒の筆頭者である, かの偉大なアーサー王について, なぜお前は書いて印刷しないのか。(略) さてくだんの高貴な方々は, その気高い征服王アーサー王について, その騎士たちについて, 聖杯の歴史について, アーサー王の死について, ぜひ書物を印刷してもらいたいと私に切望されました。アーサー王はこの王国内に生まれ, この王国の王だった人だし, すでにフランス語では, アーサー王やその騎士たちの事績について, 立派な書物が沢山出版されているのだから, お前はゴドフロア・ド・ブイヨンなど, 他の八人の偉人よりも, アーサー王の行動や偉業をこそ印刷すべきであると断言なさいました。

(同書, 8頁)

「イングランド王国の高貴な方々」の依頼に対して, キャクストンは当初は「アーサー王などという人物は実在しない, アーサー王について書かれた書物はすべて架空の話にすぎない, その証拠にアーサー王およびその騎士たちに関して何ら記載していない年代記がいくつかあるではないか,

と主張する人びとがおりますが」(同書, 8-9頁), と「アーサー王」の实在を否定していた。それに対して, キャクストンに「アーサー王の事績」の出版を要望した一人が, 「アーサー王が実在したという証拠はたくさんある」(同掲), と反証し, キャクストンが出版を決意する経緯が説明される。ここで興味深いのは, 「アーサー王の实在」を立証する事績が列挙されていることである。

アーサー王が実在したという証拠はたくさんある。まず, グラストンベリの修道院には, ちゃんとアーサー王の墓がある。また『ポリクロニコン』[14世紀イギリスのベネディクト会修道士ヒグデンがラテン語で書いた, 天地創造から1360年にいたる「世界史」で, ジョン・オブ・トレヴィサが英訳, それをキャクストンが改訂・増補して1482年に印刷出版した]の第五卷第六章と, 第七卷第二十三章には, アーサー王の遺体が埋葬され, 後に発見されて, くだんの修道院へ移されたと書いてある。(略)またガルフリドゥスも, ブリテンに関する書物の中に, アーサー王の生涯について書き記している。しかもイングランドの諸所方々に, アーサー王およびその騎士たちに関する形見の品が残っているし, 今後も永久に存続するであろう。(同書, 9頁)

「ガルフリドゥス」とは, ジェフリ・オヴ・モンマスのラテン名で, 彼の『ブリタニア列王史』は以後のアーサー王物語を扱った多くの作品の典拠の一つになっているが, キャクストンは当時, 「歴史書」のレッテルを貼って出版された書物に対して, 記述された「歴史」に対して全く疑うことがない。さらに, 「発見された遺物」についても, その真贋に疑問を抱かない。

ウェストミンスター大修道院の、聖エドワードの墓には、緑柱石の中に赤い封ろうを押されたアーサー王の玉璽が残っていて、それには、ラテン語で「ブリタニア、ガリア、ゲルマーニア、ダーキアの皇帝なるアーサー卿」と記されている。同様に、ドーヴァー城にはガウェイン卿の頭蓋骨と、クラドック卿のマントが残っている。ウィンチェスターには円卓がある。また、ラーンスロットの剣そのほかさまざまな遺物が各地に残っている。これらのことを考え合わせれば、この国にアーサーという名の王が実在していたということを、道理をもって否定しきれない人はいまい。(略) ウェイルズにも、カメロットのまちにも、アーサー王の実在を証明する遺跡が残っている。地下に埋もれた大石とか、見事な鉄製の遺物、王室の墓などを目撃した人が現に幾人もいる。(同書、9-10頁)

「歴史」として伝えられてきたアーサー王についての事績や遺物は、アーサー王の「実在の証拠」となり、キャクストンを納得させ、マロリーの「アーサー王物語」を「アーサー王の歴史」として出版させることになる。キャクストン編集の『アーサー王の死』では、アーサー王がモルドレッドとの激戦で重傷を負い、その時に小舟に乗って「アヴァロンの島」に渡ることが語られる。しかしながら、アーサー王の死の真相について詳細はなく、アヴァロンの島についても具体的な説明はない。というのも、ただ、三人の王妃（その内の一人はアーサー王の姉である妖妃モルガン）に囲まれて、船で運び去られたということだけが知られており（同書、437頁）、「それ以上のことは一切、権威ある本には書いてない」（同掲）からである。

アーサー王の死の「真相」が曖昧なため、「イングランドの各地で、アーサー王生存説をとる人がある」（同書、438頁）、とマロリーは言及し、「キリストの御意志でどこか別の場所へかくまわれていて、そのうちには

きっとまたアーサー王が戻ってきて聖十字架をかちとるだろう」と、人びとが「噂している」と記す。しかしながら、マロリー自身は「そうなるとは思わない」。彼はその噂を否定して、「アーサー王はこの世で死んだ」と断言する。なぜなら、アーサー王の墓石の上に次の詩が刻まれているという人が多いからだ―「過去の王にして未来の王なるアーサー、此処に眠る」。

2章 記録の中の〈ブリタニア〉

1. カエサル『ガリア戦記』（紀元前 58-51 年）

『ガリア戦記』は、「カエサルのガリア戦争に関する覚え書き」で、カエサルがガリアを征服した戦いの記録であり、カエサル自身によって書かれた。カエサルはガリア征服戦争の中で、「ほとんどすべての戦争を通じ、敵の中にブリタンニア人の提供した援軍がいるのに気づいていた」（『ガリア戦記』、第4巻、138頁）。そこで、カエサルは、「[ブリタニアに] 上陸し人種をつぶさに観察し、島の位置や港や軍隊の陸揚げ地点を知れば、それだけでも大いに有益だろう」（同掲）と考え、ブリタニア遠征を計画する。しかしながら、ブリタニアは、カエサルにとっても、ガリア人にとっても、〈未知の島〉だった。

(1) 最初のブリタニア遠征（紀元前 55 年）

『ガリア戦記』で紹介される「ブリタンニア」（ブリタニア）は、カエサル率いるローマ軍が体験した「ブリタニア」として描写されている。以下は、カエサルたちが見た「ブリタニア」である。

じっさい商人は別として、やむを得ぬ理由もなしに、そこに〔ブリタニア〕立ち寄るような人は誰もいないし、商人といえども、ブリタンニアの沿岸地方の、それもガリアに面している部分以外は、

どこも知らない。それでカエサルが各地より商人をよび集め、島の大きさや住みついている部族の名目や人口などを尋ねても、あるいは彼らの戦争のやり方や風俗習慣を尋ねても、多数の大型船を受け入れるに相応しい港があるかと尋ねても、全く要領を得なかったのである。

遠征という冒険をおかす前に、まずこうした知識を得るため、適当と認めた副官ウオルセヌスと一隻の軍船を先発させた。彼はあらゆる事物を探求し、出来るだけ早くカエサルのもとに帰ってくるように命じられた。カエサルは全軍を率いてモリニ族へ向けて発つ。ブリタンニアにはそこから渡るのが、一番近かったからである。そこには、近隣のあらゆる地方から船を集め、さらに去年の夏、ウェネティ族戦に建造していた船団も集結するように命じた。

そうしているうち、カエサルの計画が知れ、商人を通じてブリタンニアにも伝えられると、その島の多くの部族から、彼のところには使節がやってくる。人質を渡しローマ国民の支配権に従うと約束するためであった。カエサルは彼らの申し出を聞き、寛大な処遇を約束し、今のこの決意を末永く固く守り通すように励ました。

モリニ族の土地でカエサルは、船が集結するまで出発をのばしているうち、彼のもとにこの部族の多くの郷から、前年の謀反について自己弁解に使節がやってきた。自分らは野蛮な人間で、ローマの習慣を知らなかったため、ローマ国民に戦いを挑んだ。自分らはカエサルの命令には、何でも従うであろうと約束した。

この事件はカエサルにとって大変好都合と思われた。というのも、後に敵を残して出発したくなかったし、(中略)ブリタンニア遠征を先へ延ばすべきではないと考えていた。そこで彼らにたくさんの人質を渡すように命じ、これが持ってこられると、モリニ族の降伏

を認めた。

(中略)

カエサルは(中略)航海に適当な天候をつかみ、(中略)最初の船団とともに、ブリタンニアに着く。するともうそのあたり一帯のあらゆる丘が武装した敵の大軍に陣取られているのが見えた。

(中略)

原住民は、ローマ軍の意図を見通し、騎兵隊と戦車…を先発させ、残りの兵でわが軍[カエサル率いるローマ軍のこと]の後をつけ、船から上陸するのを阻止しようとした。ローマ軍はいろいろの理由からきわめて苦しい立場に追い込まれた。味方の船が大きいため、沖の深いところでないと停泊させられなかった。わが兵は、このあたりの地理には不案内であり、両手をふさがれ大きくて重い武器の負担に圧迫されていた。船から飛び込むと同時に、波の中に足場を確保し、敵と渡り合わねばならなかった。

一方、敵ときたら、乾いた岸辺から戦い、(中略)案内に通じた場所で思う存分飛道具を投げ、海戦によくならした馬を縦横に駆り立てた。こうした事情から、わが軍は非常に怯えていたし、こうした戦闘形式はまったく未経験だったから、いつも陸上の戦いで見せていたようなあの迅速果敢な活躍と烈々たる闘魂は、発揮されなかった。

(中略)

両軍は烈しく戦った。味方は戦列を維持することも、堅固な足場を得ることも、自分の部隊の軍旗の後に従うこともできなかった。(中略)敵はどんな浅瀬もみな知っていたので、ローマ兵が幾人か組になって別々に船から降りたとみるとすぐ、海岸より馬を駆って、不利な立場の見方を襲い、大勢で少数を封じ込めたり、あるいは、

楯のない右側をめがけ全部に飛道具を放ったりした。

これにカエサルが気づくと、軍船付属の短艇や、そして哨戒艇も兵で満たすように命じた。これらを苦戦中とみた味方のところへ支援隊として差し向ける。わが軍が乾いた岸に足場を確保するとたちまち、味方が全員この後につづき、敵に向かって攻め寄せ、逃亡へと追い込んだ。(中略)

敵は戦闘に敗れ逃亡の疲れから回復するとすぐ、カエサルのところへ平和使節を送ってきた。人質を与え命じられたことを果たすと約束した。(中略)

カエサルは、ブリタンニア人のほうから進んで、大陸にまで使節を送り講和条約を求めておきながら、理由もなく戦争をしかけたとって非難し、彼らの軽率な振る舞いは許すと宣言し、人質の提供を命じた。一部の部族はすぐ手渡し、一部は、土地が遠いため数日の後、呼び寄せてから持参するといった。

そのうち指導者たちは同胞に故郷の畑に帰るように命じて、そしてあちこちよりカエサルのところへ集まってきて、自己と自分の部族国家をカエサルに任し始めていた。

(『ガリア戦記』, 138-144 頁)

このような顛末で、ローマ軍とブリタンニアの間に「平和」が確立するかと見えたが、ブリタンニアのカエサルの元に向かっていて船団が、突然の大嵐に襲われると、ブリタンニア側の態度が急変する。カエサルが軍団兵を運ばせていた軍船は砂浜に停泊していたが、潮流に浸され、沖で投錨していた貨物船は嵐に打ち付けられ、幾隻かの船は粉々に裂けた。残りの船も、とも綱やその他の船具を失って、航海の役にたたなくなってしまう。軍隊を帰すことができる船がなくなり、船の修繕に必要なものは何もなかった。

そして、だれもがブリタニアで冬を過ごすとは想定していなかったのに、越冬するだけの食糧の貯えは、まったく手配されていなかった。

こうしたローマ軍の苦境を知ったブリタニアの指導者たちは、手の平を返して、敵愾心を燃やし、「穀物やその他の必需品をローマ人から絶ち、戦いを冬までずるずると引き延ばすのが最上の作戦だ」（『ガリア戦』、144-145頁）と考える。「これでもしローマ軍が敗北するか、帰還を阻止されるかすると、今後はもう戦争を持ち込む目的で、ブリタニアに軍隊を運んでくることは二度とあるまい」（同書、145頁）、というのがブリタニアの思惑だった。そして、ブリタニアは「謀反」を企て、ローマ軍に再挑戦し始める。

ブリタニア人は畑で労働していたり、あるいはローマ陣営の中に入出入りする者もいて、「謀反」の動きは感じさせなかったが、ブリタニアの「反撃」は突然だった。彼らは騎兵と戦車を駆使して、ローマ軍の陣営を脅かす。しかしながら、カエサルは疾走と力の続くかぎり、遠くまで敵を追って行き、多数を殺し、ついで遠く広く穀物倉を焼き払って」（同書、148頁）ブリタニア人の反撃を撃退。すると、ブリタニアは再び、カエサルに講話使節を派遣してきたが、カエサルは事態が再発することを予想し、彼自身は大陸に出帆する。そして、ブリタニアは結局、カエサルの元にふたつの部族のみが人質を送ってくるが、残りの部族はカエサルとの約束を無視した。

(2) 第2回ブリタニア遠征（紀元前54年）

カエサルはドミティウスとクラウディウスが執政官になると、ガリアの冬期陣営を後にしてイタリアに帰り、巡回裁判を終え、属州での騒動を鎮圧、再び、ガリアに向けて出発し、各地の冬期陣営を視察して廻った。そして、800隻以上の船団—ここには、カエサルの幕僚の船や、従軍商人が

戦利品を買い占めるための持ち船が含まれた一で、ガリアのイティウス港からブリタニアに向かった。

ブリタニアでは、ローマに抵抗する大軍が集結していたが、カエサルの大船団を目の当たりにすると、「海岸から退却して、小高いところに身をひそめ」た。カエサルは、軍隊を陸に揚げ、陣営を張り、ブリタニアの敵軍の位置を確認すると、敵に向かって進軍した。ブリタニアの騎兵と戦車は、行軍中のローマ兵と烈しくわたり合うが、ローマ軍がすべての方面で優勢となり、ブリタニアを森の中へ追い込んだ。しかし、ローマ軍が警戒を怠ると、彼らは突然、森の中から出現し、ローマ陣営の前に歩哨に立っていた兵士に攻撃を加えた。カエサルが二個大隊を支援に送ると、ブリタニアは「戦列のど真ん中を大胆にも突破し、そこからかすり傷一つ負わずに撤退」する。

ブリタニアの戦術にローマ軍は翻弄されていた。

この日の戦いを通じてわかったことは、わが軍団兵は、武具が重い
ため、退却する敵を追い討ちできなかったし、正規の戦列から進
んで離れる勇氣も持たなかったので、このような敵にたいし、全く
歯が立たないということであった。そして騎兵にも戦う際、大きな
危険の伴うことがわかった。それは大抵の場合、敵が故意にすら退
却し、これを追う騎兵が軍団兵と少しでも離れたとみると、いつで
も戦車から飛び降り、徒歩でわたり合い、味方〔ローマ軍〕に不利
な戦いをさせたからである。

一方、正規の騎馬戦においても彼らの作戦は、味方〔ローマ軍〕
の退却にも追跡にも、いつでも同じ危険をもたらした。それに加え、
敵はけっして密集して戦わず、小隊ごとに広い間隔をおいて戦った。
予備隊をあちこちに配置しておき、次々と交代で他人の退却を援護

し、精力の新鮮な者が疲れた者にとって代わった。

(『ガリア戦記』, 166 頁)

ブリタニア人は堡壘と壕で守り固めた通行困難な森林地帯を要塞と呼び、敵の襲来を避ける時には、ここに集まることにしていた。この場所は、「天然の要害と人工の防御施設とで頑丈に防備されて」(同書, 169 頁)いたが、ローマ軍は二方面から攻撃を開始すると、「攻撃にたえられなくなり」(同掲)、ブリタニア人は要塞の別の箇所から逃亡した。しかしながら、ブリタニア軍の最高指揮官であるカッシウェッラウヌスは、ブリタニアの海岸地方を統治していた四人の王に使者を送り、「全兵力を挙げて、ローマの船団根拠地を奇襲し、占領するように命じた」(同掲)。ところが、ローマ軍が海岸の陣営での戦いに勝利すると、カッシウェッラウヌスは「これまでに蒙った多大の被害や、荒らされた農地のこと、なかんずく同盟部族の寝返りに心を動かされ」(同掲)、カエサルのところへ降伏の使節を送る。カエサルは、ガリアでいつ暴動が突発するかもしれない、また、大陸で越冬する予定であり、戦える夏の季節もあとわずかになったこともあって、ブリタニア軍の最高司令官の要請を受け入れた。カエサルはブリタニアに人質の提供を命じ、毎年ブリタニアがローマ政府に支払うべき年貢の額を指定した。

(3) ブリタニアの地理

ブリタニアの地理については、最初のブリタニア遠征では描写されていないが、二度目の遠征でブリテン島の南部をほぼ制圧したときの記録では、ブリタニアの地理と生活様式が描写されている。

ブリタンニアの人口は莫大で、数え切れない。家屋敷は密集して建てられ、ガリアでの光景を彷彿とさせる。家畜の数はおびただしい。彼らは「ブリタンニア人」銅貨か金貨を使用し、あるいはこうした硬貨の代わりに、一定の重量に合わせて測った鉄の棒を使用する。ブリタンニアでは内陸地方に錫が、海岸地方に鉄が産出される。鉄の量はごくわずかである。彼らの使う銅は輸入されたものである。樞（ぶな）と縦（もみ）を除くと、ガリアにあるような木は、みんな見られる。兎と鶏と鶯鳥を食べるのは、よくないと考えられている。これらの家禽を飼っているのは、気晴らしや娯楽のためである。気候はガリアより温和で、寒さもそれほど厳しくない。

島の自然の姿は、三角形をなしている。その一辺はガリアに面している。この側面の（中略）一方の角は（中略）東の方を向き、もう一方の低い方の角は、南の方を向いている。この側の距離は約七百五十キロに達する。

三角形のべつな一辺は、ヒスパニアの方を、つまり西の方を向いている。このあたりにヒベルニア島がある。その大きさは推定されるところ、ブリタンニアの半分ぐらいで、ブリタンニアからこの島への横断距離は、ガリアからブリタンニアに渡る距離に等しい。この両島間の海峡に、モナと呼ばれる島がある。この付近には、小さな島がたくさん散在していると考えられている。これらの島々では冬至のころ、つづいて三十日間も夜であると、ものの本に書いてある。われわれもこの点を確認めようとして、水時計で正確に測定したところ、夜が大陸より短いということがわかっただけで、それ以外に何の新事実も発見されなかった。（中略）

第3の面は、北を向いている。この側と向き合って、陸地は小さい横たわっていない。けれども、その東の角は、どちらかという

とゲルマニアの方を向いている。

(『ガリア戦記』, 164-165 頁)

ブリタニア島の自然を紹介する地理的記述は、決して正確な解説ではない。たとえば、ブリタニアの西にヒスパニアの北部地方があるとか、ブリタニアとヒスパニアの間に、「ヒベルニア島」(アイルランド島)がある、という説明は間違っている。「古代作家に共通」の誤解(國原、『ガリア戦記』, 注, 200 頁)とする解釈もあるが、しかしながら、ブリテン島は少なくとも紀元前 6 世紀には、実際の航海によって、ギリシア人に知られていたようだ。古代ギリシア人はマッサリア(現マルセイユ)から出航する航海の途中で、ブリテン島を見ていた。マッサリア出身の航海者ピュテアスは、おそらく紀元前 322~285 年の間の航海で、コーンウォールから帆船で出発してブリテン島を完全に一巡りしており、ブリテン島が三角形をしていると記録していた(『ブリテン諸島の歴史』, 229-230 頁)。カエサルは、ブリテン島が島であることを知っていたし、クラウディウス帝と同時代の地理学者ポンポニウス・メラは、オークニー諸島には 30 もの島があることや、「ハエモダエ」(おそらくシェットランド)には、7 つの島があることを記録している。大プリニウスは島々を列記していく中で、アウター・ヘブリディーズ諸島もインナー・ヘブリディーズ諸島もリストに加えていた。また、彼は「カレドニアの森」についても最初に言及していた。

2. ローマ帝国が見たブリテン島

(1) ブリテン島の地理情報

古代ローマの政治家であり軍人のアグリコラは、紀元後 70 年代にブリテン島のウェールズ半島の諸部族が征服されたことを受けて、ブリテン島の完全征服を試み、「北の境界線」以北に進軍する。総督としてブリテン

島北部への遠征最後に彼の艦隊がブリテン島を巡航したが、これによりブリテン島の地理的特徴や、部族、地名に関する詳細な情報もたらされる。アグリコラの進軍の60年後に書かれたプトレマイオスの『地理書』の中で、これらの情報が整理されて記録された。また、同じ時期に歴史家プルタルコスは、ブリテン島近海の島々の調査を皇帝から命じられていたデメトリオスの遠征のことを記述している。デメトリオスは、ブリテン島の周辺には草木の生えていない島が点在し、その中には「聖者の暮らしている島」(おそらく、ヘブリディーズ諸島)があると、記録していた。タキトゥスによれば、アグリコラは紀元後81、または82年にアイルランドと向かい合う地点に軍団を配備し、アイルランド島の出入り口や港に関する情報を得ていた。この情報は島で交易をしていた商人からローマにも伝えられることになった。

(2) 補給地としてのブリタニア

紀元41年にクラウディウスが第4代皇帝の座に就くと、彼はすぐさまブリタニア征服に乗り出した。紀元43年に将軍アウルス・プラウティウス率いる四個軍団と補助軍の四万の大軍が、ブリテン島のケント諸港に上陸する。対するブリトン人は、オビドウムや丘砦の防塁を強化し、伝統的な戦車戦法で応戦するが、ローマ軍の重層歩兵による密集戦法に圧倒され、メドウェイ川岸でローマ軍に敗れた。勝利を掴むと、皇帝クラウディウスがブリテン島に上陸し、ローマ軍を指揮してテムズ川を渡り、ブリトン人軍団の本拠地コウルチェスタを占拠して、服属させた。

クラウディウスがブリテン島の征服に着手した理由のひとつは、皇帝の座を得たばかりのクラウディウスの地位が当初は不安定であったため、難攻不落のブリテン島の征服に成功して、皇帝としての威信を確立することだった。しかし、それにもまして、ブリテン島が豊かな資源を有し、地理

楽園伝説と *King Richard II* の〈イングランド〉

的にもローマ軍にとって最適の補給地になることが、征服の最大の要因だった。紀元9年、大陸のトイトブルク（ドイツ）での敗戦以後、ローマ軍はライン川を国境に定め、多数の軍隊を常駐させて守りを固めていた。守備軍の装備と給養には大量の物資が必要だった。ブリタニアの主要な輸出品である、穀物、家畜、皮革、鉄は、すべて、軍事必需品に他ならなかった。カエサルやクラウディウスがブリテン島を侵略し、征服する以前から、ブリテン島の諸部族は農業共同体を運営して、大陸の食糧や衣服、動物などを入手できるほどの農業生産高を挙げていた。自給自足に留まらず、戦士貴族階層に食糧を供給し、大陸からも「輸入」できるほどの利益を生む農業生産者であった。

ローマによる征服のあと、ブリテン島では、スペルト小麦、オーツ麦、ライ麦、エンドウ豆、ケルト豆、亜麻など、鉄器時代以来の作物が継続して栽培されていたが、紀元1世紀後半までには、多くの農場でコリアンダー（香辛料）やオピウム・ポピー（薬草）が栽培され、サクランボやプラムも育成された。農場のほとんどが混合農業形態を取り、肥料、牽引耕作、乳製品、毛、皮革、食肉の目的で家畜が重視された。主要な家畜は、牛、羊、豚で、飼養品種を特化させた地域もあった。コッツウォルズ丘陵では、羊毛用の羊の飼育に集中し、テムズ川の段丘から数キロメートル離れた地域では、広い牧場での馬の飼育の重要性が高かった。食肉資源の中心は、牛と豚だった。鶏も、ローマ風農場にはよく見られた家畜であった。コッツウォルズ丘陵の集落では、養殖漁業も重要な産業を担っていた（サルウェイ、『ブリテン諸島の歴史』、5章、185-200頁）。

結論〈地の果てのはるかなる〉ブリテン島

だが私たちがいる者は、ここから渴いたアフリカ人の土地へ行き、
またある者はスキュティアの、白亜の急流オアクセス川へ、

あるいは全世界から遠く隔たるブリタニア人の国へ行くだろう。

(ウェルギリウス、『牧歌』、第1歌、64-66行)

ラテン文学黄金時代の詩人、ウェルギリウスは、ローマの退役軍人への報奨のために土地を奪われたイタリアの農夫たちの心情を描くとき、農民たちの逃亡先を「地上の僻遠の地」として、アフリカ、スキュティア、ペルシアに加えてブリテン島を挙げ、「全世界から遠く隔たる」と表現した。ウェルギリウスが語った、「蛮族の住む僻地の島であるブリテン島」のイメージはウェルギリウスの時代から400年以上のちの4世紀末の文学の中でも生き続けた。ブリテン島は紀元前55年のカエサル侵攻以来、ローマ帝国の一部となり、多くのローマ人が帝国行政に携わり、また、商用で足を運んでいるにもかかわらず、文学の中では、〈地の果てのはるかなるブリテン島とその蛮族たち〉のステレオタイプが形成される。これにより、ブリテン島侵攻は、ローマの軍隊を「海の向こう」へ運ぶカエサルやクラウディウスたちの豪胆さを強調するプロパガンダになった。同様に、コンスタンティウス一世がスコットランドの「最果ての地」を訪れたことは、「ほとんど神話的な出来事」として記述された。また、コンスタンティヌス大帝が、「ローマ帝国の片方の端」であるヨークで即位し、権力とキリスト教信仰を「ローマ帝国のもう一方の端」(コンスタンティノープル)へと運んだと記した書簡の中で、「気の遠くなるほどの距離」をことさらに強調したのも、神話的偉業を讃えるプロパガンダの一環だった。プロパガンダの中では、ブリテン島は「恐怖の海の向こうに横たわっており、しかもブリトン人たちは獐猛なことで有名」(『ブリテン諸島の歴史』、280-281頁)だったので、ブリテン島上陸はローマ人に「さらなる名誉」(同掲)をもたらすと考えられたのである。

ローマ帝国の大きな属州で軍を統率する将軍たちは、執政官(組織上の

楽園伝説と *King Richard II* の〈イングランド〉

最高の行政官)以上の存在である。帝政前期には、ブリテン島の属州総督は、属州シリア総督と並んで、最も高い権能を持った地位だった。属州ブリタニア総督は、通常の補助軍団に加えて三つ(時には四つ)の完全な正規軍団を保有し、その軍事体制はローマ帝国の軍隊の10%を示していた(『ブリテン諸島の歴史』, 284頁)。ブリテン島にはローマが未征服の部族もあり、彼らとの間には戦争が勃発する可能性が常にあった。「常に戦争の危険をはらんだ」ブリテン島は、皇帝たちに「軍事的名声」をもたらす、魅力的な〈僻遠の地〉であり続けた。

古代ブリタニアは、ギリシア神話やローマ神話、アーサー王伝説が描いたような〈楽園〉ではなかった。「不死の神ですらこの場にすれば、飽かず眺めて楽しむ」オギュギアや、黄金の林檎の果樹園、「特別に神の恩寵を得た者」が住むことを許される幸福の島、春の女神の常春の野エンナ、アーサー王の〈癒やしの島〉アヴァロン島—ブリテン島は、古代ギリシアやローマ、ケルトの人々が希求する〈至福の島〉に名前を連ねるような場所ではない。それでも、のちに、シェイクスピアが『リチャード二世』を書いたエリザベス朝イングランドが、〈楽園幻想〉を創造して国家イメージを昇華させ、イングランドの楽園伝説を構築するとき、〈地の果てのはるかなる〉ブリタニアが、〈楽園〉に変容するのは、必然だった。ちょうど、カエサルたちのブリタニア征服が、古代ローマの名声確立にとって必然であったのと同様に。

参考文献

- 1) シェイクスピア, ウィリアム, 『リチャード二世』, 松岡和子訳, ちくま文庫, 2015年。
- 2) Shakespeare, William. *King Richard II*, *The New Cambridge Shakespeare*,

- 1984/2003.
- 3) Wells, Stanley, and Gary Taylor, et. al. *William Shakespeare; A Textual Companion*, Oxford University Press, 1987/1997.
 - 4) Orgel, Stephen. *The Authentic Shakespeare and Other Problems of Early Modern Theatre*, Routledge, 2002.
 - 5) Wells, Robin Headlam. *Spenser's Faerie Queene and the Cult of Elizabeth*, Barnes & Noble Books, 1983.
 - 6) Meres, Francis. *Palladis Tamia. Wits Treasury*, Printed by P. Short for Cuthbert Burbie, 1598.
 - 7) Harrison, William. *The Description of England: Classic Contemporary Account of Tudor Social Life*, Dover Publications Ins., 1995.
 - 8) Milton, John. "The History of Britain," *Prose Works, Vol. 2*, The Online Library of Liberty.
 - 9) Bradshaw, Brendan and Roberts, Peter, ed. *British Consciousness and Identity: The making of Britain, 1533-1707*, Cambridge University Press, 1998.
 - 10) ジェフリー・オヴ・モンマス, 『ブリタニア列王史』, 瀬谷幸男訳, 南雲堂フェニックス, 2007年。
 - 11) ジェフリー・オヴ・モンマス, 『マーリンの生涯』, 瀬谷幸男訳, 南雲堂フェニックス, 2009年。
 - 12) Holinshed, Raphael. *Chronicles; "The History of England," Vol. 2*, The Online at Project Gutenberg.
 - 13) ホメロス, 『イリアス』上・下, 松平千秋訳, 岩波文庫, 1992/2021年。
 - 14) ホメロス, 『オデュッセイア』上・下, 松平千秋訳, 岩波文庫, 1994/2019年。
 - 15) オウディウス, 『変身物語』上・下, 中村善也訳, 岩波文庫, 1981, 1984/2010年。
 - 16) ウェルギリウス, 『アエネーイス』, 杉本正俊訳, 新評論, 2013/2018年。
 - 17) ウェルギリウス, 『牧歌 / 農耕詩』, 小川正廣訳, 京都大学学術出版会, 2004/2013年。
 - 18) 高津春繁, 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 岩波書店, 1960/1978年。

楽園伝説と *King Richard II* の〈イングランド〉

- 19) Barber, Richard. *King Arthur in Legend and History*, The Boydell Press, 1973.
- 20) Cavendish, Richard. *King Arthur and the Grail: The Arthurian Legends and Their Meaning*, Weidenfeld & Nicolson, 1978.
- 21) Morris, John. *The Age of Arthur: A History of the British Isles from 350 to 650*, Barnes & Noble Books, 1973/1996.
- 22) T. ブルフィンチ, 『中世騎士物語』, 野上弥生子訳, 岩波文庫, 1942/1980/1995年。
- 23) 川崎寿彦, 『楽園と庭』, 中公新書, 1984年。
- 24) ブレキリアン, ヤン, 『ケルト神話の世界観』上・下, 中公文庫, 2011年。
- 25) 鶴岡真弓, 『ケルトの想像力』, 青土社, 2018年。
- 26) 桜井俊彰, 『物語 ウェールズ抗戦史—ケルトの民とアーサー王伝説』, 集英社新書, 2017年。
- 27) 飯田操, 『イギリスの表象—ブリタニアとジョン・ブルを中心として』, ミネルヴァ書房, 2005年。
- 28) マロリー, トーマス, 『アーサー王の死』, 厨川文男, 厨川圭子訳, ちくま文庫, 1986/2017年。
- 29) カエサル, 『ガリア戦記』, 國原吉之助訳, 講談社学術文庫, 1994/2019年。
- 30) サルウェイ, ピーター, 『ブリテン諸島の歴史 1: ローマ帝国時代のブリテン島』, 慶應貴塾大学出版会, 2011年。
- 31) サルウェイ, ピーター, 『古代のイギリス』, 南川高志訳, 岩波書店, 2005年。
- 32) 南川高志, 『海のかなたのローマ帝国—古代ローマとブリテン島』, 岩波書店, 2003年。
- 33) 青山吉信編, 『イギリス史 1: 先史～中世』, 山川出版社, 1991/2006年。

SYNOPSIS

The Myth of England as Other Eden

ONO Yoshiko

In Shakespeare's *King Richard II*, John of Gaunt, Duke of Lancaster, described England before the reign of Richard II as "other Eden," lamenting "This land of such dear souls …/ Is now leased out." The Duke implied that the political failure of the king had corrupted the "garden" image of England and destroyed England's greatness inherited from the Black Prince, Richard I.

King Richard II was written and staged in 1595 as the initial play in a sequence about the Lancastrian phase of English history. The first edition (Q1) was published in 1597 and promptly followed by two further issues (Q2 and Q3) in 1598. It was the first play-text to prove its popularity, which indicates the "garden" image of England should have been shared among the Shakespearian audience and readers.

This paper is an attempt to examine the myth of England as "the second Eden," tracing back the origins of the legend to Classical mythology and history. The first chapter consists of three parts: a survey of "Britannia," ancient Greek and Roman mythology, and Arthurian legends. The second chapter gives a closer reading of "Britannia" under the Roman Empire.